

岳陽楼がくようろうに登るのぼ（杜甫とほ）

昔むかし 聞くき 洞庭どうていの水みず

今いま 上のぼる 岳陽楼がくようろう

呉楚ごそ 東南とうなんに 坂さけ

乾坤けんこん 日夜にちや 浮うかぶ

親朋しんぼう 一字いちじ 無なく

老病ろうびょう 孤舟こしゅう 有あり

戎馬じゅうば 関山かんざんの 北きた

軒けんに 憑よつて 涕泗ていし 流ながる

昔聞洞庭水 今上岳陽樓

呉楚東南坂 乾坤日夜浮

親朋無一字 老病有孤舟

戎馬関山北 憑軒涕泗流

解説 岳州（湖南省岳陽）にある岳陽楼に登って作ったもの。

語釈 ※岳陽楼||湖南省岳陽市にある高殿。洞庭湖に面し、はるかに君山が望まれて風景がすこぶるいい。※洞庭水||洞庭湖に同じ。※呉楚東南坂||坂はひらく。さける。呉は洞庭湖の東方、楚は湖北・湖南両省と浙江・河南両省の一部。呉や楚の地が洞庭湖によつて東と南にさけているの意。※乾坤日夜浮||乾は天、坤は地。天地の万象が日夜この洞庭湖の水面に浮かんでいる。湖の大きなことを言っている。※無一字||手紙の来ないこと。※老病||年をとつて病気にかかっている。※有孤舟||一そうの舟がある。作者は舟で放浪の旅を続けていたのである。※戎馬||兵馬。戦争をいう。※関山北||多くの関所や山々を隔てた北方の地。長安をさす。※憑軒||楼上の手すりによりかかつて。※涕泗||なみだ。涕はなみだ。泗ははなみず。

通釈 私は昔から洞庭湖の眺めのすばらしいことを聞いていたが、今はじめてこの岳陽楼に登つて、それが噂どおりであることを知った。楼上から眺めると、呉と楚の地とは東と南の方にさき分れて果てしなく広がっており、また、この広大な洞庭湖の水面には、天地のすべてのものが昼も夜もその影を映している。実にすばらしい眺めである。この雄大な景色に対して、ふとわが身をかえりみると、故郷の親戚や友人たちからは一通の便りもなく、老いて病気になる身には一そうの小舟があるだけである。思えば多くの関所や山々を隔てた長安のあたりでは、今なお戦争が続いていることであろう。故郷に帰ろうにも帰れないのである。楼上の手すりによりかかつて、国の前途を考え、己の流浪を悲しんでは、自然と涙があふれ出てくるのであった。